

(様式6-2)

研究成果概要

所属学校名 鈴鹿市立白子中学校

職・名前 教諭 諸戸 美奈子

- 1 事業の名称 教育臨床内地留学
- 2 留学先の名称 三重大学 教育学部
- 3 研究主題 中学校における効果的な別室登校支援
- 4 研究成果の概要

学校現場では、不登校生徒以外にも学級ですごすことのできない生徒がいる。学級や学校ですごすことのできない生徒は、保健室や相談室など学級以外の居場所や教育支援センター(適応指導教室)を活用することが望まれる。

報告者は、校内適応指導教室(別室登校)の設置と運営に携わり、担当者として不登校対策と別室登校生徒の援助を行ってきた。学校によってシステムにかかわる校内体制や生徒対応には違いがあると考えられる。しかしながら、中学校における別室登校について校内体制や具体的な支援の内容についての実態は明らかになっていない。

本研究では、校内適応指導教室の実践について、別室登校のシステム構築の観点や生徒事例の検討から援助サービスの成果や課題を明らかにすることを第一の目的とした。次に、中学校における別室登校の実態と具体的な支援を明らかにすることによって、別室登校支援のあり方について検討し、学校の実態に応じた別室登校のシステム構築と効果的な支援について指針となるべきものを探ることを第二の目的とした。

その結果、援助サービスの効果として次の2点が挙げられた。①校内に別室を設置したことで、学級で過ごすことができず特別の援助ニーズのある生徒が、集団生活の適応を目標に援助サービスを受ける居場所として機能した。生徒は、教員や支援ボランティアとの個別の関わりによって信頼関係が築かれ、小集団活動の中で対人関係やコミュニケーションのスキルを身につけることができること、ニーズに応じた学習支援や進路指導によって学力の定着と進路の保障が図られること、校内に設置されているので学級の生徒とのつながりがもちやすいことから、段階的な学級復帰が図られる。②「コア援助チーム」「校内適応教室援助チーム(拡大援助チーム)」「生徒支援推進委員会(コーディネーション委員会)」の3種類の援助チームが、学校全体で援助を行う体制として機能していることである。

課題として次の4点が挙げられた。①学校の現状に応じて、校務分掌としての別室(校内適応教室)担当者や援助サービスを行う教員配置を編成すること、②保護者を援助チームの一員に位置づけることが困難なケースがあること、③校外の援助資源として、学校の援助ニーズに応じてボランティアを確保するシステムが必要であること、④校内委員会の設置と時間確保を行うことである。

中学校における別室登校の実態調査から、不登校の生徒以外にも別室登校支援を必要とする生徒がいることが明らかになった。そこで、不登校生徒と問題行動・反社会的行動生徒を対象とする別室登校支援のあり方を検討した。その結果、どちらの生徒にも、教員による受容と共感的理解信頼関係の構築によって自尊感情と自己肯定感が回復し、積極的・肯定的行動の促進につながる事が明らかになった。一方、校内の援助資源だけでは援助の提供に限界があるため、校外の援助資源を活用した連携を図る必要があることがわかった。

以上の知見より、別室登校支援における回復に向けての3ステップが示された。【ステップ1】安心してすごせる居場所・自尊感情と自己肯定感 【ステップ2】自己の振り返り・学習や活動への取り組み 【ステップ3】集団生活への適応・学級復帰・進路保障である。このように、不登校や問題行動・反社会的行動生徒など集団生活に適応できない生徒が別室登校において回復するには段階があり、それぞれの段階に応じた支援が必要とされる。別室登校を必要とする生徒が苦戦している状態や状況は個別性が高いため、段階ごとの回復に要する時間は、生徒一人ひとり異なる。一様に学級復帰を目指すのではなく、それぞれの段階で、生徒のニーズに応じた適切な支援を行うことによって、個に応じた回復が図られる必要がある。